

中国語における“人”で終わる使役を表す形容詞の用い方の特徴の考察
A study of “Causative Express” Adjective Words End with “Ren” in Chinese Language

尚 煜琛

SHANG Yuchen

目次

はじめに

(1) 中国語の“感人”の用い方の特徴の考察

- 1 春秋時代の“感人”の用い方
- 2 戦国時代の“感人”の用い方
- 3 漢代と南北朝時代の“感人”の用い方
- 4 晋代と唐代の“感人”の用い方
- 5 宋元時代の“感人”の用い方
- 6 明代の“感人”の用い方

(2) 中国語の“动人”の用い方の特徴の考察

- 1 戦国時代の“动人”の用い方
- 2 漢代の“动人”の用い方
- 3 唐代と宋代の“动人”の用い方
- 4 明代と清代の“动人”の用い方

おわりに

注

参考文献

はじめに

古川裕(2003)では、一定の条件を満たせば、中国語の“把”構文と“被”構文は“把”と“被”を外せるようになり、簡略化した文となることができるとい現象を提示した。そして、「“X+人”表現にはそれと似た現象がある」と述べ、“气人”のような“X+人”型形容詞は、“叫”“使”“让”などの使役動詞を外した“叫人生气”のような使役を表す文の略だと指摘し、使役を表す文と“X+人”型形容詞の関連性を明らかにした(注1)。下記の表1がそれである。

表1 中国語における人で終わる使役を表す形容詞

感人	动人	雷人	惊人	吓人
(很感人)	(很动人)	(很雷人)	(很惊人)	(很吓人)
喜人	醉人	气人	烦人	恼人
(很喜人)	(很醉人)	(很气人)	(很烦人)	(很恼人)

同じ“人”で終わる“咬人”“骂人”“骗人”“喊人”“逼人”“助人”“喊人”“留人”などの言葉は、副詞“很”で修飾できない動詞であるため、今回の研究対象外とする。また“疼人”“宠人”などの言葉は副詞“很”で修飾できる形容詞であるが、使役を表す形容詞ではないため、研究対象外とする。

本論文の研究対象となる中国語における“人”で終わる使役を表す形容詞の特徴は下記の通りになる。

- ① “使人感动” “使人震惊” “使人沉醉” のように、使役の構文にも拡張できること。
- ② 副詞“很”で修飾ことができること。

本論文では、その中で特に顕著的な特徴を持つ“感人” “动人” にしぼって研究対象とする。

(1) 中国語の“感人”の用い方の特徴の考察

『白水社 中国語辞典』(注2)、『小学館 中日辞典 第3版』(注3)、Weblio 中国語例文(注4)の例文を対象に、“感人”の日本語訳に関して調査を行った。その結果を下記の表2にまとめた。

表2 中国語の“感人”の日本語訳一覧

感動的	12
感動させる	3
感動させられる	2
感動する	1
感動を与える	1
心を打つ	1

表2から、“感人”の日本語訳として「感動的」「感動する」がよく使われることが分かった。

『新中国70年70部長編小説典藏』(注5)を対象に、現代中国語における“感人”の用法を調査した。その用い方の特徴は以下のようにまとめられる。

- ① 【“感人的”+名詞】の形で使われ、辞書では「感動的」「感動する」と訳している

が、場合によっては意識が必要である。

1. 这是一段感人的故事。/これは一くだりの感動的な物語である。『白水社 中国語辞典』

2. 说到“重吃一番交杯酒”的时候，便满面带笑，斜着眼睛望着心中暗喜的杨军，真是具有一种感人的魅力。/横目で「床盃、もう一回飲もう」と言いながら笑顔いっぱい楊軍を見て、そんな彼には人を魅了するような魅力が溢れているように見える。《紅日》

例2は、中国の長編小説《紅日》に出てきた、片足をなくした負傷兵「梅福如」が素晴らしい演技で現場を盛り上げるシーンの描写である。この場合の“感人”を日本語にどのように訳すのかについて、筆者は“感人”は英語の「evocative」に近い意味を表すため、「感動的」や「感動する」のように訳すと、違う意味になってしまうと考える。例2の“感人的魅力”は、「素晴らしい魅力」「人を魅了するような魅力」「人々を感心させる魅力」がふさわしいと言える。

② “感人肺腑/感人心胸”の形で使われ、「人の心を打つ」という意味を表す。

『新中国70年70部長編小説典蔵』で調査した結果、“感人肺腑”のような“感人”を含んだ例文は32例あり、そのうちの7例は“感人肺腑”であった。“感人至深”も3例、“感人心胸”も1例あった。下記の例がそれである。

3. 他用哽咽的音调喃喃地念完了作者在最后所说的那些沉痛而感人肺腑的话……这时，天已经微微地亮出了白色。/彼は喉を詰まらせながら、著者が文末で書いた重たくて人の心を打つような言葉をぶつぶつと読んでいた……その時、空はもう白み始めた。《平凡的世界》

4. 一片呼声，加上哭声，声声感人心胸。/呼び声と鳴き声が交じり合い、人々の心を打つような響きであった。《李自成》

《平凡的世界》と《李自成》の例を見ると、“感人”は四字熟語として用いられることが多い。古代中国語では四字熟語の代わりに“感人心”はよく使われていたが(注6)、「人の心を打つ」という意味を表す現代中国語の“感人肺腑”や“感人心胸”とは違い、古代中国語の“感人心”は「感化する・影響を与える」という意味を表すこともある。

近年、“感人”はネット用語としても使われ、新しい意味が生まれた。ネット用語としての“感人”は、形容詞としてあるものに対して不平や不満を言う時に使われる。「(～は・が)XXすぎる」という意味を表すほか、悪口を言って相手を中傷する時に使われ、「(～は～が)XXい」という意味を表す。以下の例がそれである。

5. 这视频画质感人。/この動画の解像度は低すぎる。

6. 打捞大黄蜂，掉落率感人。大建北宅，出货率感人。/ホーネットをサルベージしようとしたら、ドロップ率が低すぎる。連続建造でティルピッツを入手しようとしたら、出現率が低すぎる。

7. 楼主智商感人。/(スレ主は)頭がおかしい。

8. 这游戏的装备强化成功率感人。/このゲームの装備強化成功率が低すぎる。

ネット用語としての“感人”は、主として下記のように二種類の用い方に分けられる。

①あるものに対して文句を言う。物価が高い、値段が高い、画像の解像度が低い、ゲームの装備強化の成功率が低いなどの状況に対し、不満を表す際に使われ、日本語に訳せば「XXすぎる」になる。

②悪口を言って相手を中傷する。“水平感人”（水準が低い）、“智商感人”（頭が悪い、頭がおかしい）などの用法があり、日本語に訳せば「低い」「悪い」「おかしい」など貶しめの形容詞になる。

1 春秋時代の“感人”の用い方

次に“感人”の用い方について春秋時代から、歴史的用法の調査の結果を説明する。

春秋末期の《易传・象传・咸》では“感”と“人心”（人の心、つまり人の精神世界）が組み合わせて用いられていた。下記の例がそれである（注7）。

9. 天地感而万物化生，圣人感人心而天下和平。/天と地が交感すれば万物が生まれ育つ。聖人のまごころが万民を感化することにより、天下平和になる。《易传・象传・咸》

《易传》に用いられる“感人心”の“感”は一字動詞で、“人心”（民の心、その精神世界）はその対象である。字面から見ると、前文で提示した用法②（現代中国語の“感人肺腑”のような人の「心を打つ」意味を表す表現）と類似するが、実は意味が異なる。“感人心”は「人々を感化する」の意味を表す。「人の心を打つ」意味を表す“感人肺腑”とは違い、《易传》に用いられる“感人心”は儒家の教化思想（人に儒家の思想を教え、よい影響を与えて善に導くこと）を表す。前者は「瞬間・短い時間の感動」の意で、後者は「長い間の教化」の意である。

“感人心”は、「感化する・影響を与える」という意味を表す。戦国時代の儒学者の思想を含む《礼记・乐记》と《荀子・乐论》に見られる“感人”がその由来だと考えられる。

2 戦国時代の“感人”の用い方

戦国時代の“感人”の用例は主として《礼记・乐记》と《荀子・乐论》に見られる。

10. 夫物之感人无穷，而人之好恶无节，则是物至而人化物也。/外物は常に止むことなく人に影響を与える。人は好き嫌いを控えずすべて受け入れると、ものに征服され、人としての天性を失い本能の欲に従うものになってしまう。《礼记・乐记》

11. 乐也者，圣人之所乐也，而可以善民心，其感人深，其移风易俗，故先王著其教焉。/聖人は楽を好む。其れは人々の心を優しくさせ、深く人を感化させられ、よくない風俗習慣を改められる。故に先王たちは、楽の教えを重んじる。《荀子・乐论》

12. 凡奸声感人，而逆气应之；逆气成象，而淫乐兴焉。正声感人，而顺气应之；顺气成象，而和乐兴焉。/悪い楽が人に影響を与えたら、人に潜む悪気がそれに応じる。悪い風習が流行ったら、人々の心を惑わせ秩序を乱れてしまうような音楽も流行っていく。良い楽が人に影響を与えたら、人に潜む正気がそれに応じる。正気が広まっていけば、穏やかな音楽

が広く流行っていく。《礼记・乐记》

《礼记》と《荀子》の例を見ると、春秋時期と戦国時期の“感人”は人から人に「感化する・影響を与える」という意味を表し、主語が人に影響を与えることにより、人の心（精神世界）が影響されるという意味を表す。

《礼记》と《荀子》で使われている“感人”は「感化する・影響を与える」という意味を表し、「長い間の影響」により生じた結果を表す。上記の三つの文は、それぞれ「外物の人への影響」「楽の人への影響」「悪い楽や良い楽の人への影響」を表す例である。これらの例は《说苑》《史记》《汉书》などにも多く引用されていた。そのため、古代中国語の“感人”が広く使われていた理由は、《易传》《礼记》《荀子》による影響が大きいからだと言える。

以上のことから、春秋戦国時代において、“感人”は儒家が楽に対する思想を表す文に多く使われていたという特徴が窺える。

3 漢代と南北朝時代の“感人”の使い方

漢代は《礼记》《荀子》の“感人”を含んだ文を引用したものが多かった。下記の例がそれである。

13. 感人善心。/人を感化してその心を優しくさせられる。《风俗通义・声音・琴》

例13のような表現もあるが、その意味は《易传》《礼记》《荀子》の“感人心”“感人”と同じであると考えられる。

14. 歌哭，众人之所能为也，一发声，入人耳，感人心，情之至者也。/歌うと泣く。そういう二つのことは誰でも出来るが声を出し人の耳に響かせ、他人を感動させるのは、感情がなかったらばできぬものだ。《淮南子・缪称训》

15. 丝桐感人情，为我发悲音。/琴は私の気持ちを読み取っているように、悲しい郷の音を出してくれる。《七哀诗》

前漢の《淮南子》に見られる“感人心”は、字面からは《易传・彖传・咸》の“感人心”と同じように見えるが、（長く続く）影響や感化を表す意味ではなく、使役の動作を表す「XXが人を感動させる」の意味で使われているものである。“感人”が「感動する」という意味に変化するという傾向が示されていることが分かる。《淮南子》の“感人心”は、前文で提示した用法②（現代中国語の“感人肺腑”のような「人の心を打つ」意味を表す表現）に類似する表現だと考えられる。

《七哀诗》の“感人情”は「人の気持ちが読み取れる」という意味を表し、“感”（感知する）+“人情”（人の気持ち）の用法であり、現代中国語の“感人肺腑”などの表現との関連性はないと考えられる。

後漢・許慎の《说文解字》における“感”の解釈も“感人”が「感動させる」の使役的意味へ変化していく傾向を示すものである。《说文解字》による“感”の解釈は下記の通

りである。

・感：动人心也（“感”とは、人の心を動かすという意味である）。《说文解字・第十下・心部》

この解釈から、“感人”と“动人”との強い繋がりも見られる。現代中国語において、“感人”と“动人”の使い分けがはっきりしないのは、《说文解字》の解釈、若しくは当時の“感人”と“动人”に対する理解が近いからだと考えられる。

漢代以後の三国時代では、宋代の《太平御覧》に収録されている孫権の話と、曹丕による《列异传》にも“感人”という表現が出てきた。

16. 此神女也，愁貌尚能感人，况在欢乐！/仙女のような美しい女だ！哀愁を帯びた表情だけで人を魅了する、ましてや笑顔は言うまでもない。《太平御覧》

例 16 で用いられている“感人”の用法も古代中国語の“动人”に近い。古代中国語の“动人”は、「美しい女性を褒め称える」際によく使われていた。例 16 で示したように、古代中国語でも“感人”は人を魅了するという意味を表すことがあり、そこからも当時の“感人”と“动人”に対する理解が近いということが裏付けられる。また、現代中国語“感人”の用法①で提示した“感人”の日本語訳として考えられる「素晴らしい」「人を魅了する」の意味も、“动人”に近いことが窺える。

4 晋代と唐代の“感人”の用い方

西晋の《三国志》《裴希声侍中嵇侯碑》と東晋の《怀春赋》《秋夜》《怀归谣》《断酒戒》にも“感人”が使われている。そのうち、《断酒戒》は《礼记》の“物之感人无穷”を引用したものと見られる。

西晋の《三国志》《裴希声侍中嵇侯碑》には、“感人神”の用法が見られる。

17. 惠风横被，化感人神，遂凭天威，招合遗散。/その恩恵は風の如く地元を吹き、人と神を感動させる教化の功があり、遂に天子の名望をかりて流民を集めた。《三国志・吴书十六・陆凯传》

18. 忠诚感人神，义声震四海。/神明まで感動させるその忠義は、天下に広く知られている。《裴希声侍中嵇侯碑》

《三国志》と《裴希声侍中嵇侯碑》で使われている“人神”は「人と神」の意味である。“感人神”の“感”は「感動させる」の意味であり、“人神”と組み合わせれば「人と神を感動させる」という意味を表す。字面から見ると「人の精神」と誤解してしまう恐れがあるが、“感人心”や“感人情”のような「(人の)心や精神世界」(人が有するもの)を表すのではなく、人とそれ以外のものが並列関係にあることを表す。また“感人神”は「神明まで感動させる」(人はともかく、神すら感動される)という意味もあり、程度の強さを表す。

《怀春赋》《秋夜》《怀归谣》の“感人”には「しみじみと」の意味も含まれ、元と明

の時代の戯曲によく使われていた“伤感人”に近い用法である。「しみじみと」の意味を表す“感人”には、物が人の精神世界を変える働きを表す形容詞へと変化する傾向が見られる。下記の例がそれである。

19. 夫荣雕之感人，犹色象之在镜。/草木の栄えと散らしは、鏡に映る万物の形貌の変化にも似て、しみじみとさせる。《怀春赋》

唐の時代において、“感人”は古文や唐詩によく使われていた。

清代康熙四十四年（1705年）に出版された唐の主な古代詩をまとめた《全唐诗》を調査した結果、“感人”を用いる唐詩が18首あった。

古文においては、主に《群书治要》《通典》において“感人”の用例が見られる。その14例は下記の二つの用法に分けることができる。

①「感化する」の意味を表す。作者が《礼记》を引用し、音楽が人に与える影響を説明する文に用いられる。下記の例がそれである。

20. 夫音声能感人，自然之道也。/音が人を感化させるのは、自然である。《通典·乐三·历代制造》

②《三国志》に出る用法に近く、動詞“感”＋“人情”や“人神”で、「感動させる」の意味を表す。

21. 臣闻作乐崇德，以感人神。/臣は、楽を作ることで帝王の功を歌い上げ、人と神も感動させることができると聞いたことがある。《通典·乐七·东宫宴会奏金石轩悬及女乐等议》

唐代の古文全体から見ると、“感人”の用例数が多く、唐以前の各時代の特徴が窺えた。

唐の古文とは異なり、唐詩では、文中における位置は文中から文末へ転移する現象が見られる。

文末に置かれるのが“感人X”（Xは“心”“情”“深”“意”などの成分）ではなく、“感人”だけである唐詩は下記の二作である。

22. 温和乍扇物，煦姬偏感人。/天候がよいで扇を使うにちょうどよく、周りが暖かくて最も人を気持ちよくさせる。《全唐诗·卷三百四十七·赋得春风扇微和》

23. 古称浮磬出泗滨，立辨致死声感人。/泗滨の石で作られた磬があって、君子がその心に響くような声を聞いて、節操と義行を知り、国の為に犠牲になることをもいとわない覚悟ができたこともあったという。《全唐诗·卷四百二十六·华原磬一刺乐工非其人也》

唐代以前の例とは異なり、《华原磬一刺乐工非其人也》の“感人”は音楽を修飾し、形容詞の特徴を持つものである。

文末に“心”“情”“深”“意”などの語が“感人”の後につく表現も多い。《全唐诗》に出てきた18例のうち、“感人深”は2例、“感人情”は4例、“感人心”は3例、“感人意”は1例あった。いずれも「深く人を感動させる」「感動的」の意味を持ち、形容詞化の傾向を示していたが、「感化する」（闻君政化甚圣明，欲感人心致太平。《骠国乐一欲王化之先迩后远也》）を表す例もあった。

5 宋元時代の“感人”の使い方

宋に至ると、「注疏の学」が盛んに行われたため、当時の儒家学者が孔子及びその後学の論述を引用し、自身による論述を加えることが多かった。中でも《礼记》の楽に関する論述が多く引用されたため、“感人”を含む文も多くなった。「注疏の学」の流行によりこの時期に“感人”を含む文が多く見られるようになったと考えられる。

24. 其仁德感人如此。/その仁徳はかくも人を感動させる。《太平御览·居处部十九·市》

宋代新儒家の代表的人物である朱熹とその弟子の論述をまとめた《朱子语类》でも“感人”が多く用いられていた。これも「注疏の学」からの影響だと考えられる。

また宋代には、“感人”を用いて書学(書法)の素晴らしさを褒める用法も見られる。

25. 慈恩寺塔有荆叔所题一绝句，字极小而端劲，最为感人。/慈恩寺塔には荆叔が書いた絶句があって、その字は小さくて力が感じられる。とても味があって、人々を感心させる。

《容斋随笔·容斋五笔·卷七》

現代中国語“感人”の用法①で提示した日本語訳として考えられる「人々を感心させる」の意味と近い一例である。

“感人”の用例が多い唐詩とは異なり、清代の朱祖謀が編集した《宋词三百首》を調査した結果、宋词では“感人”が使われていないことが分かった。元の代表的な雑劇14編と《全元散曲》に収録されている散曲4303編を調査した結果、“感人”と関係があるのは“感人怀”の一例だけであることが分かった。これらのことから、散曲でも“感人”がほとんど使われないと考えられる。

6 明代の“感人”の使い方

明代の代表的な雑劇10編を調査した結果、“感人”の用例は見当たらず、「悲しい」を表す“伤”を加えた人物の感情を強調する“伤感人”は10編のうち7編で見られ、例文は10例あった。

26. 娘子，你看一路上风景，好生伤感人也呵！/お嫁さん、来た道の風景見ていたか、その風景はなんと悲しいものであろう。《拜月亭》

明代の詩をまとめた《明詩綜》では、“感人心”が1例、“感人意”が2例、“感人情”が2例、“感人”が1例、“孝感人”が2例あった。

明代は白話小説が数多く作られたが、白話小説で使われる“感人”は少なく、それらは主として明代末の作品に見られる用例である。31部の白話小説及び小説集の中で、重複した例を除くと4例あり、そのうち1例は詩であり、白話小説ではない。“闲向书斋阅古今，偶逢奇事感人心”がそれである。

27. 我闻诗可感人，我今做一首诗与你，你到帅府首唱此词，韩公英雄气魄，必然感动。/詩は人々を感心させることができると聞いてる。今書いてやる。將軍のところへ行って、

その詞を歌ってみよう、韓公は英雄の器があつて、それを聞いて必ずや感動されるであらう。《西湖二集・今古奇观》

これは現代中国語“感人”の用法①で提示した日本語訳として考えられる「人々を感心させる」の意味と近い一例である。

明とその以前の詞（韻文文体）をまとめた《词綜》と《明词綜》では、“感人”は使われていない。

(2) 中国語の“动人”の用い方の特徴の考察

筆者は中国語の“动人”の用い方の特徴について、『中国語辞典』（白水社）、『中日辞典』（第3版）、Weblio 中国語例文の例文を対象に、“动人”の日本語訳に関して調査を行った。その結果を下記の表3にまとめられる。

表3 小学館『中日辞典 第3版』、Weblio 中国語例文による“动人”の日本語訳

“动人”の日本語訳（頻度順上位六位）	
感動的	12
心を打つ	7
感動させる	6
感動させられる	3
心を動かす	2
キュート	2

小学館『中日辞典 第3版』、Weblio 中国語例文における“动人”の例は51例あり、出現頻度が二回を超えたのは、上記の六つになる。

“动人”の日本語訳として出現頻度の最も高い表現は「感動的」で、「感動する」よりも出現頻度が高い。“感人”と異なるのは、「心を打つ」や「心を動かす」のような表現の出現頻度は「感動する」と同じく高い。「キュート」、「美しい」など褒め称える意味を表す表現もある。故に（辞書では六種類の訳し方しかない）“感人”と比べれば、“动人”の訳し方のほうが多いと言える。

“动人”の用い方と特徴は、下記のようになる。

①物事が人の精神世界に影響を与え、物事の性質を表す場合は「感動的」を用い、人が物事に影響され、感情が生じるという意味を表す場合は「感動させる、心を揺さぶる」などの慣用表現を用いる。

28. 他的演讲很动人。/彼の講演はたいへん感動的である。『中国語辞典』（白水社）

29. 从来也没遇到过那么动人的场面。/あんなに感動させられる場面をいままで見たことがない。『中日辞典』（第3版）

②形容詞として用いられ、見た目が「素晴らしい、立派、美しい」であることを表す。

30. 风采动人。/风采が立派である。『中国語辞典』（白水社）

31. 银铃般的动人的声音。/鈴を転がすような美しい声。『中日辞典』（第3版）

“动人”が実際にどのように使われているかを考察するため、『新中国70年70部長編小説典蔵』を対象に、現代中国語における“动人”の用法を“感人”と比較しながら調査した。56部の長編小説のなか、“动人”は256例もあり、“感人”（同じ56部の長編小説の調査では32例だけあった）と比べれば、使用頻度が明らかに高い。文学作品における現代中国語の“动人”は、主に下記のような用法の特徴が見られる。

①二字漢語と組み合わせて使われる。251例のうち、“动人”が二字漢語と組み合わせて使われるのが87例あり、10回以上使われたのは、“楚楚动人”は20例、“动人心魄”は11例である。

32. 在柔和幽静的灯光里，妻子还是显得那样年轻俏丽、楚楚动人。/柔らかで静かな明かりの中で、妻は相変わらず若くて美しく、楚々として人の心を打つ。《抉择》

33. 是小提琴协奏曲《梁祝》那动人心弦的旋律吗？/これはバイオリン協奏曲「梁祝」の心に迫ったメロディーでしょうか？《穆斯林的葬礼》

②「人の見た目・表情・姿」を主語とする場合が最も多く、ほぼ半分を占めている。「人の見た目・表情・姿」を主語とする場合は、251例中101例で、他の主語は下記の表4の通りとなる。

表4 “动人”の主語のカテゴリ、及びその出現回数（「人の見た目・表情・姿」を除く）

主語	出現回数
情景（特定のシーン）	34
歌曲・声	33
ストーリー	25
精神・感情	19
景色	15
言葉	15

表4に示されているように、「情景」（特定のシーン）、「歌曲・声」が“动人”の主語として用いられることが最も多いことが分かった。

1 戦国時代の“动人”の使い方

次に“动人”の使い方について、春秋時代から、歴史的用法の例文調査の結果を説明する。

戦国中期に成書された『莊子』に“动人”の例が見られる。

34. 有虞氏死生不入于心，故足以动人。/虞舜は死を覚悟した者で、その覚悟は人々の心を動かすことができるに足る。《庄子・外篇・田子方》

35. 不精不诚，不能动人。/誠意が足りないと、相手の心を動かす/動揺させることもできない。《庄子・杂篇・鱼父》

この時期において、“动人”は主に「心を動かす」、「動揺させる」という意味を表し、字面から見ると、前文で提示した「人々を感化する」の意味を表す“感人心”と近い用法に見えるが、実際には意味が異なる。《田子方》の“动人”は、「人々の好感・認めを得る」という意味も含まれる。また、《鱼父》の“动人”も「誠意や言葉で人を動揺させて、認めを得る・何かの行動を取るような約束を取り付ける」という意味も含まれ、「人々を感化する」の意味を表す“感人心”とは異なる。

2 漢代の“动人”の用い方

漢代になると、“动人”が多く使われるようになった。

36. 广乐九奏万舞，不类三代之乐，其声动人心。/美しい曲が繰り返し奏でられたのを聞き、「万舞」の舞も見た。夏、商、周の音には似ず、心に触れた音楽でした。《史记・世家・赵世家》

この時期において、“楚楚动人”“动人心魄”“动人心弦”などのように二字漢語と組み合わせて使われる用法はできていないが、“动人心”など一字漢語と組み合わせて使われる用法が定着されていたと見られる。同じように「心に触れる」という意味を表すため、“动人心”は現代中国語“动人心弦”“动人心魄”の原型だと言える。

また、「人を動かす/人を駆り立てる」意味を表す例も見られる。

37. 赏均则国寡，而赏薄不足以动人。/報酬は全員均等に配れば国庫が貧しくなり、報酬が少なければ人を動かす/人を駆り立てることができない。《新书・卷四・匈奴》

38. 动人以言，竭而弗终。/（とあるタイプの人）は言葉で他人を動揺させることはするが、言い尽くせたりはしない。《逸周书・大戒解》

上記の“动人”の意味は、「人を動かす/人を駆り立てる」に近い。それと比べれば、“感人”は「人を駆り立てる」という意味を表す用法は見られない。漢代となると、“感人”は多く音楽の効果（人に与える影響）を説明する際に用いられる。それと比べれば、“动人”は「言葉」「財産」などが人を駆り立てる効果を説明する際に用いられることが多かった。

3 唐代と宋代の“动人”の用い方

唐代になると、“动人”は“感人”と同様、唐詩にもよく使われていた。

39. 浓绿万枝红一点，动人春色不须多。/一面の緑の中に紅色の花が一輪咲いている。美しき春の景色はそれぐらいで十分である（過ぎたるは猶及ばざるが如し）。《泊宅編》

その詩に用いられていた“动人”は、春の景色を修飾しており、「美しい」の意味を表す“动人”の最も古い一例である。

また、宋代では“动人”も口語的な文章にも出てくるようになった。

40. 如本不必说，自家却强说几句，要去动人，要去悦人，是‘以言聒之也’/元は口を開けなくてもよろしいことだが、強いて言葉で人を動揺させ、人の機嫌を取るとは、まさに「甘い言葉での勧誘」ってことさ。《朱子语类》

上記の文に示されているように、口語的な文章に使われることも、宋代における“动人”の特徴であると言える。

4 明代と清代の“动人”の用い方

明清時代になると、“动人”は《金瓶梅》《西游记》《封神演義》《紅樓夢》などの白話小説にも使われるようになった。そして「財産」「女性の容姿」が“动人”の主語として多く使われるようになり、“动人”と世俗的な生活との繋がりがより強くなってきたことが窺える。

《金瓶梅》《西游记》《封神演義》《紅樓夢》の四作において、“动人”は19回使われていたが、そのうちの4回は主語が「お金・財産」、10回は「容姿」が主語として使われていた。

“动人”に比べれば、同時期の“感人”は、ほとんど白話小説に使われなかった。明清時代に“动人”が前述の世俗的な生活に関わる場合に述賓複合語として頻繁に使われ、“动人”の“動”は述語としての役割を果たす場合が多く、“动人”の述賓複合語性質もより強くなったという特徴が窺える。

おわりに

本論文は中国語における「人」で終わる使役を表す形容詞の用い方及びその日本語訳の特徴について、とりわけ“感人”“动人”のような表現を研究対象とし、例文調査を通してこれらの表現の用い方の特徴について考察した。また歴史的変遷についても例文調査を行った。以下は調査の結果である。

① “感人”は「感動的」「感動する」と訳すことができるが、中国語の“感人”は、日本語の「感動的」「感動する」よりも広い意味を持つ。「evocative」という意も強く、「素晴らしい」「人を魅了する」「人々を感心させる」などの日本語訳も考えられる。

② “感人”の本来の意味は「感化する」に近いものであり、儒家とのかかわりが強い。《礼記・楽記》と《荀子・楽論》にも見られる。儒家の教化思想（人に儒家の思想を教え、よい影響を与えて善に導くこと）を表す。

③ 晋代から、“感人”は形容詞化の傾向を示していた。西晋の《三国志》《裴希声侍中嵇侯碑》には、“感人神”の用法が見られる。字面から「人の精神」と誤解してしまう恐

れがあるが、“感人心”や“感人情”のような「(人の)心や精神世界」(人が有するもの)を表すのではなく、人と他のものが並列関係にあることを表す。また“感人神”は「神明まで感動させる」(人はともかく、神すら感動される)意味もあり、程度の強さを表す。

④古代中国語では、“感人”は現代中国語には見られない「書学(書法)の素晴らしさ」「女性の美しい」を褒め称えるという用法があり、それは「素晴らしい」「人を魅了する」という意味を表し、“动人”に近い用法である。

⑤ネット用語として使われている“感人”は、主として「あるものに対して文句を言う」「悪口を言って相手を中傷する」、といった2つの意味で使われている。

⑥戦国時代では“动人”は主に「人の心を動かす」、「動揺させる」という意味を表す。また、「人々を感化する」の意味を表す“感人心”とは違い、「人々の好感・認めを得る」「誠意や言葉で人を動揺させて、認めを得る・何かの行動を取るような約束を取り付ける」という意味も含まれる。

⑦漢代では“楚楚动人”“动人心魄”“动人心弦”などのような二字漢語と組み合わせて使われる用法はないが、“动人心”など一字漢語と組み合わせて使われる用法が定着されていたと見られる。同じように「心に触れる」という意味を表すため、“动人心”は現代中国語“动人心弦”“动人心魄”の原型だと言える。

⑧唐代になると、形容詞としての用法も見られる。宋代では“动人”も口語的な文章にも出てくるようになった。明清時代になると、“动人”は小説に広く使われ、「お金・財産」「容姿」が“动人”の主語となることも多くなった。

⑨古代中国語における“感人”と“动人”の意味を、下記の表5のようにまとめられる。

表5 古代中国語の“感人”“动人”の意味及び日本語訳

古代中国語の“感人”	古代中国語の“动人”
感化人・影响人(感化する・影響する)	使人动揺(動揺させる・駆り立てる)
(女性的容貌等)有魅力(美しい・素晴らしい・人を魅了する) (共通的な用法)	
使人感到舒适(人を)気持ちよくさせる	X
使人感动(人を感動させる・しみじみと・人々を感心させる)	使人感动(人を感動させる・人の心をと打つ)
感动人心的(心に響くような・感動的な・人の心をと打つような) (共通的な用法)	

上記の表5から、古代中国語における“感人”と“动人”の違いが分かる。

注

(1) 古川裕〈现代汉语感受谓语句的句法特点—“叫/让/使/令”字句和“为”字句之间的语态变换〉《语言教学与研究》2003年第2期 pp. 28-37

(2) 白水社(2002)『白水社 中国語辞典』白水社

(3) 北京商務印書館・小学館(2016)『中日辞典』(第3版)小学館

(4) <https://cjjc.weblio.jp/sentence/> (検索日:2022.8.8)

(5) 『新中国70年70部長編小説典藏』

<http://www.chinawriter.com.cn/n1/2019/0923/c403994-31368489.html> で見られる。

《我们播种爱情》《苦菜花》《上海的早晨》《创业史》《艳阳天》《大刀记》《万山红遍》《蹉跎岁月》《九月寓言》《日出东方》《水乳大地》《我是我的神》《焦裕禄》《装台》の計14作は、考察価値がやや低く、日本では入手困難等が原因で、ここでは考察対象に入れなかった。

(6) 徐甜(2018)〈表达致使义的双音节“X+人”研究〉华东师范大学硕士论文

(7) “天地感而万物化生，圣人感人心而天下和平”は、孔子が書いた「易経-象伝-咸卦」への注解からとったもので、「象伝への注解」を含む《十翼》に収録されている。《十翼》は後世になって《易传》の一部とされた。故に本論文はその出自を《易传・象传・咸》であると表記している。

参考文献

(1) 李映忠(2015)〈汉语“V + 人”式综述〉《陇东学院学报》第26卷第6期 pp. 12-16 陇东学院

(2) 宋慈(2013)〈论“单音节动词性成分+人”式形容词的词汇化〉《文学教育(中)》第2期 pp. 96-96 湖北大学